

令和7年度 成績概要書

課題コード（研究区分）： 4102-426500 （道受託研究）

1. 研究課題名と成果の要約

- 1) 研究成果名：令和7年度の発生にかんがみ注意すべき病害虫
(研究課題名：病害虫発生予察調査)
- 2) キーワード：病害虫発生予察、注意すべき病害虫、新発生病害虫
- 3) 成果の要約：令和7年度に実施した病害虫発生予察調査から、多発傾向にあった病害虫として13病害虫を示した。また、令和8年度に特に注意を要する病害虫として4害虫について防除指導上の注意を喚起する。さらに、令和7年度に新たに発生を認めた病害虫として18病害虫（病害5、害虫13）を示した。

2. 研究機関名

- 1) 代表試験場・所属：担当者：中央農業試験場・病虫部・予察診断グループ・研究主幹・三宅規文
- 2) 分担試験場：中央農業試験場・病虫部・病害虫グループ、上川農業試験場・研究部・生産技術グループ
道南農業試験場・研究部・作物病虫グループ、十勝農業試験場・研究部・生産技術グループ
北見農業試験場・研究部・生産技術グループ、花・野菜技術センター・研究部・生産技術グループ
- 3) 共同研究機関（協力機関）：北海道農政部技術普及課、北海道病害虫防除所
(全道農業改良普及センター、国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 北海道農業研究センター)

3. 研究期間：令和7年度（2025年度）

4. 研究概要

1) 研究の背景

病害虫の発生はその年の発生状況や気象経過のほかに、前年の発生状況の影響を受ける。効率的な病害虫防除を実施するためにはそれらを踏まえた全道的な情報が求められる。また、道内で未確認の病害虫が突然的に発生するため、迅速な対応が求められる。

2) 研究の目的

全道での病害虫発生状況を新発生病害虫も含めて記録し、これをもとに次年度に注意すべき病害虫を示して防除指導にあたっての注意を喚起する。

5. 研究内容

- 1) 農作物有害動植物の発生状況（R7年度）
 - ・ねらい：農作物有害動植物の発生状況を記録する
 - ・試験項目等：19作物・88病害虫の発生状況を調査
- 2) 突発および新発生病害虫の診断試験および調査（R7年度）
 - ・ねらい：道内で新たに発生した病害虫を同定し記録する
 - ・試験項目等：発生調査、再現試験、同定試験

6. 研究成果

1) 農作物有害動植物の発生状況

本年度も春季から秋季まで高温で経過し、夏季の高温少雨も病害虫の発生に大きく影響した。害虫では早発が目立つとともに、飛来性害虫による被害や害虫種の変化が認められた。低温性病害の発生は少なかった。

（1）令和7年に多発～やや多発した主要病害虫

- ア 水稻のヒメトビウンカ及び斑点米カメムシ類
- イ 秋まき小麦の眼紋病
- ウ 春まき小麦（初冬まき）のムギキモグリバエ
- エ 大豆のわい化病
- オ てんさいの褐斑病、ヨトウガ（1回目）、ヨトウガ（2回目）、及びテンサイモグリハナバエ
- カ たまねぎのネギアザミウマ
- キ ねぎのネギアザミウマ
- ク キャベツのコナガ
- ケ りんごの腐らん病

(2) 令和8年度に特に注意を要する病害虫

ア とうもろこしのアワノメイガ

生食用とうもろこしに加え加工用、飼料用でも被害が多発した。本種は幼虫が雌穂に侵入し子実を食害する他、茎内に食入り、茎の被害により機械収穫が困難となる。また、飼料用の子実とうもろこしでは本種の被害によりカビ毒発生のリスクも懸念される。近年、本種は年2回の発生となっており、1回目の成虫の発生はこれまでより早い6月上旬から7月中旬に、2回目は8月上旬から9月下旬に発生が認められている。このため発生に合わせた防除開始時期は早まっており、防除時期も2回あると考えられる。防除に当たっては、加工用及び飼料用においても生食用に準じ、前年の発生量や発生予察情報を踏まえ防除を実施し、発生時期にあわせて散布適期を失しないよう注意する。また、収穫後は速やかに残渣を処理し、越冬密度を下げることも重要である。

イ 大豆の大型カメムシ類

道央、道南地域の大豆圃場で莢への加害が多数確認された。発生虫種はホソヘリカメムシ、クサギカメムシ、ブチヒゲカメムシの大型カメムシが優占し、これまでとは種構成が異なっていた。発生種の多くが成虫越冬するとされており、本年多発が認められた地域においては今後も発生が多くなると推測される。複数種が長期間にわたって発生、着莢始めから黄熟期まで加害し、被害程度は加害時期における莢と子実の生育段階で異なるため、防除は大豆の生育に合わせて実施する。発生種によって薬剤の感受性が異なるため、防除実施後は効果を確認することが重要である。

ウ てんさいの飛来性鱗翅目害虫

6月下旬、長沼町に設置した予察灯でシロオビノメイガの誘殺が確認され、7月上旬には道央、道南地域で食害が確認された。8月上旬にはシロイチモジヨトウの多飛来が確認され、その後道東地域で幼虫による加害が確認された。シロオビノメイガの若齢幼虫は網目状に食害し「尺とり」状に歩行し、シロイチモジヨトウの幼虫は腹部側面に明瞭な白色線があるなどの特徴がある。令和8年度の防除にあたっては、北海道病害虫防除所のホームページで飛来情報を確認するとともに、発生を認めた場合には速やかに殺虫剤を散布する。それぞれの種で効果の高い薬剤が異なることから、薬剤選択に留意し、防除実施後は効果を確認することが重要である。

エ 果樹の大型カメムシ類

6月下旬以降、道央、道南地域の醸造用ぶどう園地でチャバネアオカメムシやブチヒゲカメムシ等が、おうとうやりんごではクサギカメムシ等の大型カメムシ類が多発した。前年までの越冬量が多かったことに加え夏季高温で発生が早まり、個体数が増加したと考えられる。令和7年の越冬量も同様に多いと予想されることから令和8年も多発が懸念される。防除に当たっては、発生状況をよく観察し、果実被害が懸念される場合には、カメムシ類に登録のある薬剤で直ちに防除を実施する。有袋栽培も吸汁被害を抑制する効果がある。

2) 突発および新発生病害虫の診断試験および調査

(1) 新たに発生を認めた病害虫

大豆のクサギカメムシ(新寄主)、ばれいしょのトマトキバガ(新寄主)、てんさい・キャベツのシロイチモジヨトウ(新寄主)、小豆・いちご・キャベツのオオタバコガ(新寄主)、たまねぎの黒かび病(新発生)、トマト・ミニトマトの白絹病(新発生)、なすのマキバカスミカメ(新寄主)、セルリーのキタネコブセンチュウ(新寄主)、かえんさいの褐斑病(新称)、ぶどうのキクビアオハムシ(新発生)、ハスカップ・カラシツのチャバネアオカメムシ(新寄主)、マーガレットの根頭がんしゅ病(新発生)、デルフィニウムのエンマコオロギ(新寄主)、おうぎのウリハムシモドキ(新寄主)、せんきゅうのカンザワハダニ(新寄主)、せんきゅうのうどんこ病(新称)、とうきのアシプトホコリダニ(新寄主)、とうきのヒメビロウドコガネ(新寄主)

○新寄主：道内に分布することが既知である害虫の、新たな作物への加害記録

○新称：これまで正式な名称(病名、害虫の和名)のなかった新たな病害虫の名称提案

○新発生：道内の発生事例がなかった病害、道内に分布が確認されていなかった害虫

7. 成果の活用策

1) 成果の活用面と留意点

ここに記載した病害虫について、特に今後の発生動向に注意する。また、令和8年度に特に注意を要する病害虫については適切な防除対策を講じる。

2) 残された問題とその対応 なし

8. 研究成果の発表等 なし